資料９

若手教員の皆さんへ～道徳授業スキルアップのポイント～

（１）学習に臨む態度と雰囲気をつくる。

□発言の声をはっきり、大きくする。

□周囲の様子に気を遣って発言が止まらないようにする。

□教師や友だちが発言しているときは挙手しないルールをつくる。

（２）学習形態を話合いができるようにする。

□コの字型の座席配置・・学習の基盤は「意見を出し合うこと」にある。

⇒ 子供が顔を見ながら意見を述べられるようにするため。

（３）教材提示・提示後を工夫する。

□教材は教師が範読（感情をこめて読む）する。

⇒ 子供に読ませると、その子は教材の世界に入れないから。

□映像、ＢＧＭなどの活用は効果的である。

□教科書やプリントは閉じるか机の中にしまわせる。

⇒ 書かれている文章にこだわって発言していくことのないようにするため。

（４）中心発問を大切にする。

□葛藤などがあり多様な意見が出そうな場面、心情が深まり価値に迫る感動的な場面のいずれかになる。

（５）発問の後、考える時間を与える。

□すぐに挙手させない。 ⇒ 考える時間を十分に与えるため。

※意見がまとまったら､黙ってハンドサインなどを教師におくる方法もある。

□一定の時間が過ぎた後で「意見のある人は」と言って改めて挙手させる。

（６）発表の仕方・指名の仕方を工夫する。

□挙手している者だけを指名して進めない。

⇒ 挙手しなくても心に意見を秘めている場合があるから。

①教師による意図的指名 ⇒ 異なる意見などを出させるのに効果的。

②子供による相互指名 ⇒ 挙手している､挙手していないにかかわらず指名し、多様な考えを出す。

□意見のある者を全員立たせ順に言わせる。同じ意見の場合は座っていく。

（７）板書は多くの発言を聞き取ってから行う。

□板書は子供の意見を全体的に受け止めてから、いくつかのまとまりにして書くようにする。（意見の類型化を行うことが大切）

⇒ 発言のたびに書いていくと類型化できないから｡一問一答的な板書は厳禁

⇒ 教師が書いている間に、雰囲気が停滞してしまうから。

※「みんなの意見をまとめて書いてみます。自分の意見と比較しながら考えていてください。」

※あらかじめ予想される意見を想定し、教師がもつメモ用紙に区分しておくとやりやすい。⇒評価に生きる

（８）発問に対して積極的に意見を出させる工夫をする。

□扱う場面には臨場感を出すために、一枚絵などを掲示する。

⇒ 主人公に共感するとともに発言内容を多様にする効果が期待できるから。

□ペアトーク、グループトークなどを積極的に取り入れる。

（９）書く活動には配慮する。

□発問ごとにワークシートに書かせることはしない。

□①中心発問 ②価値理解の発問　③後段の「振り返り」 ④授業を終える際の感想のいずれかになる。

□発言の際は、書いたものにこだわる必要はないことを告げる。

⇒ 書いた内容は意見の参考にすぎないから。

□②は「考え・議論する道徳」の場面として重要である。③④の場合は時間を要することに留意する。（途中で止めることは内省の中断となるので厳禁）

⇒ 高学年では、授業の際に数人に発言を求めた後、それらを例として「ゆっくりこれまでの自分を振り返ってください。」として自分の現状をしっかり把握させる方法が効果的である。（家庭学習として扱うこともよい）

（10）展開前段から後段へのつなぎの部分で価値の理解を行う。

□板書を振り返って「主人公の行動や心情の変化をみてみると、主人公は『○○が大切だ』ということに気付いたことが分かりますね。」との一定のまとめを行う。

□道徳的価値そのものを問う ⇒ **『価値理解の発問』**

「○○についてどう思いますか。」「どうして○○は大切なのでしょう。」「○○とは何でしょう。」「この話は私たちに何を教えてくれているのでしょう。」

低学年では「主人公にお手紙を書いてあげましょう。」という方法もある。

（11）展開後段で自己の振り返りをしやすくする発問の工夫をする。

□「できたか」「できなかったか」のいずれかを問うことは、子供の振り返りを限定することになるので避けたい。

⇒ 人は、できたこともあれば、できないこともあるのが本来の姿である。今、思い出せることの選択肢を広げより多くの子供が意見を述べるようにするため。

※「できたこと、できなかったこと、どちらでもいいから思い浮かぶことがあれ教えてください。」マイナスの発言には「よく教えてくれましたね。」と温かい言葉掛けをすること。

（12）心の温まる終末の工夫をする。

□余韻のある終わり方にする。

□感想を書かせるというやり方にこだわらない。

（13）評価の工夫をする。

□評価のために授業を行うのではないことに留意する。

⇒ 道徳科の特質を生かした授業が行われて初めて評価が可能となる。

□ワークシートだけに頼ることはしない。

□「学習状況」を評価するのであるから、授業に当たってはメモ用紙を手にし、子供の様子で気付いたことを適宜記入していく。